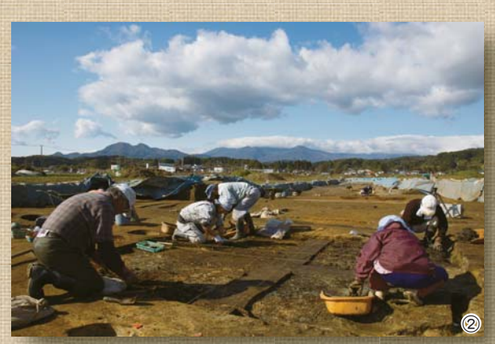
円田盆地の遺跡群

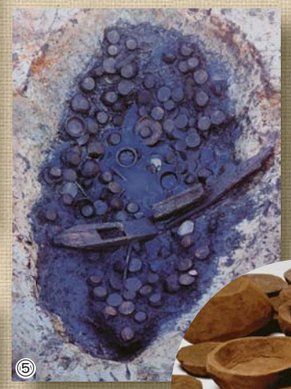
発掘成果から見えてきた 平沢・小村崎の歴史

①


②

③

④


⑤

⑦

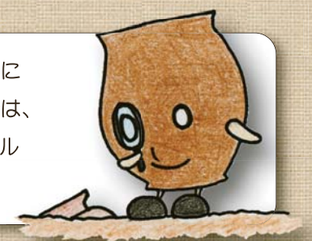
⑧

⑥

⑨

⑩

蔵王連峰を望む豊かな田園地帯の広がる蔵王町東部の一帯は、三方をなだらかな山地に囲まれており、円田盆地と呼ばれています。円田盆地の北部にある平沢・小村崎地区では、県営ほ場整備事業などに伴って数多くの遺跡を発掘調査しました。述べ10万平方メートルにも及ぶ大規模発掘調査の成果から見えてきた、平沢・小村崎の歴史をご紹介します。


文化財マスコットキャラクター・ときたん

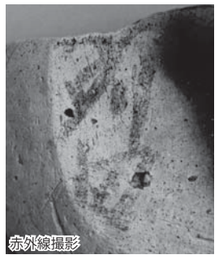
蔵王町教育委員会

「苅田」と書かれた土器

平安時代の豪族の家が発見された前戸内遺跡では、「苅田」と書かれた土器が出土しました。奈良時代の歴史書「続日本紀」には「養老5年（721年）陸奥国柴田郡の二郷を分割して苅田郡を置く」という内容の記録があります。土器に書かれた「苅田」の文字は、当時の郡名の可能性があります。

前戸内遺跡のある円田盆地北部は、現在刈田郡蔵王町に属していますが、柴田郡との境界が時代によって変化した地域です。「続日本紀」に記された苅田郡の「二郷」がどこを指すのかも明確でなく、古代の円田盆地が柴田郡と苅田郡のどちらの郡域に属したのかは未解明の謎だったのです。

前戸内の豪族の家から「苅田」と書かれた土器が出土したことで、平安時代には円田盆地を含めた現在の蔵王町のほぼ全域が苅田郡に含まれていた可能性が高くなりました。



土器に描かれていた「苅田」の文字（前戸内遺跡、平安時代）

また、現在の白石・刈田地方で苅田郡が設置された奈良時代の遺跡が集中するのは円田盆地北部と白石盆地東部（白石市中心部）で、「二郷」の中心地はこの二か所と考えられるようになって来ました。白石市の大畑遺跡では苅田郡の役所跡が発見されています。遺跡の発掘調査から、私たちの郷土・刈田郡成立の謎が、少しずつ解き明かされようとしています。

「都遺跡」の謎

円田盆地の中央に近い藪川のほとりに、かつて小高い丘がありました。古くから土器や瓦が多く見つかる場所として知られ、「都」という地名で呼ばれていましたが、昭和30年代の藪川の堤防をつくる工事で丘は削られてしまい、遺跡も完全に消滅したと思われていました。

この都遺跡を発掘調査したところ、わずかに残された丘の低い部分で大型の建物跡や、丘を囲むように巡らされた塀や溝の跡も見つかりました。飛鳥～奈良時代の土器とともに、建物の屋根を葺いた瓦も出土しています。

都遺跡で見つかった瓦（奈良時代）

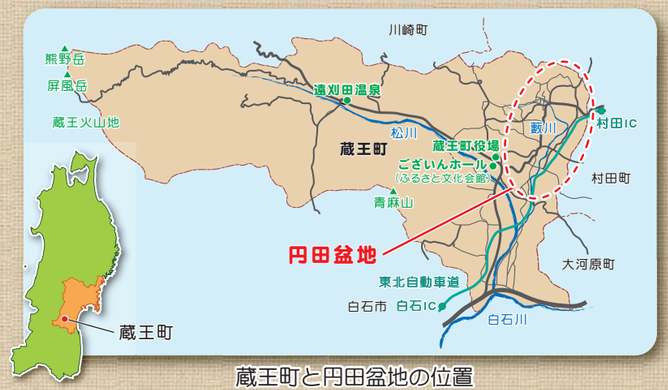
当時、瓦を用いた建物は、大和政権とつながりのある役所や寺院に限られていました。都遺跡では仏教に関わる遺物が出土していないので、役所のような施設だったと考えられます。

最近の研究では、都遺跡には苅田郡が独立する以前の柴田郡の役所が造られた可能性が議論されています。

都遺跡の謎が、発掘調査と研究から少しずつ解明されようとしています。田んぼの下で保存された遺跡には、謎を解くカギがまだまだ眠っているのです。

遺跡の保護と活用

私たちが暮らす蔵王町には、数多くの遺跡が眠っています。過去の人びとの歴史や文化を知る上で大変貴重な文化財である遺跡は、地面を掘り返すと壊れてしまうため、できるだけそのままで保存することが大切です。工事などでどうしても遺跡が壊れてしまう場合には、発掘調査をして遺跡の記録を残します。遺跡の発掘調査では、これまで知られていなかったような新しい発見もあります。それは、時には私たちを驚かせるような先人の知恵であり、私たちが地域の歴史を見直し、郷土への愛着を深めることにもつながっているのです。



蔵王町と円田盆地の位置

表紙写真解説

①発掘調査成果見学会（前戸内遺跡）
②竪穴住居跡の発掘調査（十郎田遺跡、平安時代）
③竪穴住居跡から出土した土器（窪田遺跡、飛鳥時代）
④平安時代の土器（前戸内遺跡）
⑤窪地から大量に出土した木製品（十郎田遺跡、鎌倉時代）
⑥粗く成形したロクロ製品の素材など（十郎田遺跡、鎌倉時代）
⑦江戸時代の漆器・木製品（車地蔵遺跡、江戸時代）
⑧材木塀で囲まれた飛鳥時代のムラ（十郎田遺跡）
⑨大型の竪穴住居跡（十郎田遺跡、飛鳥時代）
⑩現在に残る江戸時代の農家建築（奥平家住宅）

イラスト・復元画製作　我妻なおみ

蔵王町の歴史と文化財 公式ホームページ
dokitan.com
ときたんドットコム

http://www.dokitan.com/

編集・発行　蔵王町教育委員会　2014年5月30日発行
〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北10
TEL 0224-33-3008　FAX 0224-33-2328　info@dokitan.com

遺跡の宝庫・円田盆地

～県営ほ場整備事業と遺跡の発掘調査～

蔵王連峰の東麓に抱かれた蔵王町には、蔵王火山の造り出した変化に富む地形・地質と、四季折々の豊かな自然に育まれた山麓文化が息づいています。蔵王の山と、そこに暮らす人々が創り出した蔵王山麓の風景は、私たち町民の誇りであると同時に、未来へ守り伝えるべき大切な財産でもあります。

蔵王町には約200か所の遺跡が発見されており、私たちの地域の歴史を伝える貴重な文化遺産として保護されています。遺跡は、古文書などには記されていない地域の実情や、まだ文字がなかった時代の人びとの暮らしぶりを、私たちにありのままに教えてくれるものです。

蔵王町東部の円田盆地は、蔵王連峰を望む豊かな田園地帯です。盆地北部の平沢・小村崎地区では、大規模なほ場整備事業が計画されました。計画区域には多くの遺跡があるので、田畑となる部分は盛土で遺跡を保存し、道路や水路などの工事で遺跡に影響のある部分では工事の前に発掘調査を行なって記録を残すことになったのです。

本格的な発掘調査は平成15年度に始まり、平成23年度までに16遺跡を調査しました。総発掘面積は10万平方メートルに及びます。その膨大な成果の中には、日本の古代史にも深く関わる重要な新発見や、現在の平沢・小村崎の成り立ちを教えてくれる発見もありました。

円田盆地北部（平沢・小村崎地区）の遺跡

小村崎地区から見た蔵王連峰

私たちの足もとに眠る「遺跡」

みんなで取り組んだ発掘調査

遺跡の発掘調査は、とても大変で時間のかかる作業です。円田盆地の発掘調査では、地元の平沢・小村崎地区などから毎日たくさんの作業員さんが参加して、発掘作業に取り組みました。このほかにもほ場整備事業を行なう宮城県大河原地方振興事務所や蔵王町土地改良区など、たくさんの人たちの“地域の歴史や文化を受け継ぐこと”への理解と協力によって、貴重な遺跡の記録を残すことができました。

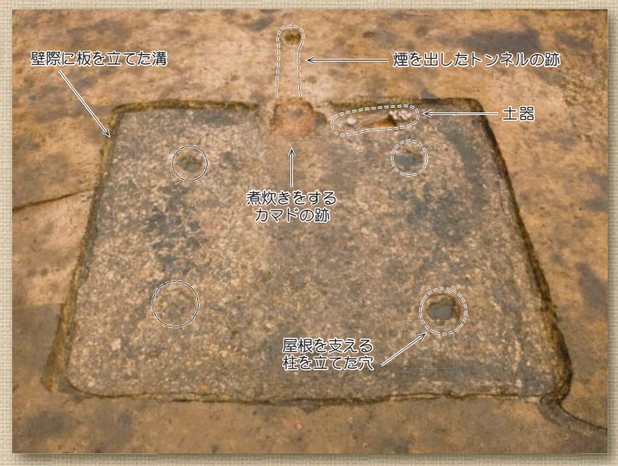
遺跡の発掘作業

竪穴住居での暮らし

縄文時代から平安時代にかけての人びとは、竪穴住居に暮らしていました。竪穴住居は、地面を平らに掘り下げたところに柱を立て、屋根をかけた家です。当時の人びとは木や草、土などの自然の材料を上手に使って暮らしていました。

円田盆地では、古墳時代から平安時代の竪穴住居跡がたくさん見つかっています。現在と変わらず、円田盆地では米づくりをする人びとのムラが多く営まれていたようです。

竪穴住居では、家の真ん中に炉を作って煮炊きをしていましたが、古墳時代の中ごろになると「カマド」が発明されます。現在でも町内の古いお宅にはカマドがありますが、そのルーツは1,600年も前にさかのぼることができるのです。



竪穴住居跡（六角遺跡・奈良時代）

竪穴住居跡の発掘調査（窪田遺跡）

竪穴住居での暮らし

炉（焚き火）での煮炊き

カマドでの煮炊き

竪穴住居跡から重なって出土した土器（六角遺跡、古墳時代）
お湯を沸かした甕の上に、お米を入れた蒸し器を乗せて使いました。

竪穴住居跡から出土した土器（①･②：六角遺跡 ･③：窪田遺跡、古墳時代）
左上の写真にある大きな甕は、鍋や水甕として使いました。

土器を使った暮らし

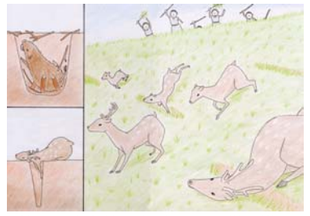
縄文時代に発明された土器は、平安時代頃までの長い間、人びとの生活用具の主役のひとつでした。円田盆地でも、たくさんの土器が発掘されています。ところで、よく「どうして遺跡の時代が分かるの？」という質問をよく受けます。上の図を見ると、炉の土器が丸く、カマドの土器が長細い形をしているのが分かるでしょうか。土器は長い歴史の中で、それぞれの地域や時代ごとに作り方や形、文様を変えてきました。ですから、遺跡から発掘された土器を詳しく観察すると、その土器が作られた時代が分かります。道を走っている車を見て、「あの車は○年式だね」と言うのに似ています。

古墳時代の土器セット（六角遺跡、古墳時代）
手前の台付きの皿は、食べものやお供え物を盛りつけるのに使いました。

縄文の狩人たち

今から数千年前、縄文時代の円田盆地は水辺に集まる動物たちをねらう縄文人たちの「狩りの場」でした。六角遺跡や原遺跡、磯ヶ坂遺跡などでは、「落とし穴」や、弓矢の「矢じり」として使った石器などが見つかっています。

盆地のあちらこちらで、丘の上のムラからくり出した狩人たちが集団でシカやイノシシなどの獲物を追いこみ、穴に落として捕らえる「追い込み猟」が繰り広げられていたのでしょう。

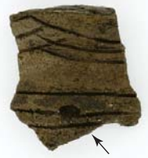

落とし穴を使った追い込み猟の様子

矢じり（磯ヶ坂遺跡）

落とし穴の調査（六角遺跡）

米づくりはじまる

円田盆地では、弥生時代のムラの跡はまだ見つかっていませんが、都遺跡や六角遺跡、磯ヶ坂遺跡などで当時の土器が出土しています。遅くとも弥生時代の中ごろには、円田盆地でも米づくりが始められたようです。



籾痕のついた弥生土器（都遺跡）

古墳をつくった人びとのムラ

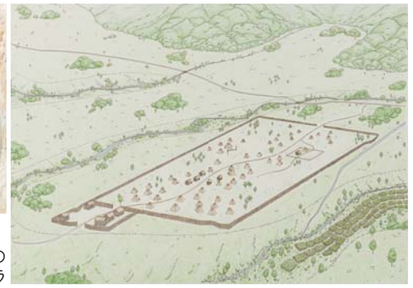
六角遺跡や窪田遺跡、十郎田遺跡では、古墳時代のムラの跡が見つかりました。円田盆地南部の古峯神社古墳や夕向原古墳群、宋膳堂古墳や天王古墳群を造った人びとのムラのひとつと考えられます。

古墳時代の住居跡（窪田遺跡）
板石を使ったカマドが作られています

律令政府の前線基地現る！
～柴田・刈田地方の開拓拠点～

大和政権が大化の改新によって新しい国づくりを進めていた頃、十郎田遺跡の丘に、周囲を塀で囲んだ大規模なムラが突如として出現しました（表紙写真⑧）。このような囲いのあるムラは、大和政権の律令政府が東北を治めるための役所の前身として造られたものだと考えられています。この十郎田遺跡のムラを拠点にして、柴田・刈田地方の開拓が進められた可能性が議論されています。日本の国の原型がつくられた飛鳥時代の歴史の記憶が、円田盆地にも刻まれているのです。

塀の跡に残る材木


十郎田遺跡の
塀で囲まれたムラ

刈田郡に移り住んだ人びと
～奈良時代の開拓移民のムラ～

奈良時代の養老５年（721年）、それまでの柴田郡から独立して新たに刈田郡がつくられました。この頃のムラの跡が、六角遺跡、窪田遺跡、堀の内遺跡などで見つかっています。

このムラは、大和政権が東北地方で勢力を拡大させるために送り込んだ、移民の人びとのムラです。

出土した土器を見ると、人びとは関東地方から福島県域へ、さらにそこから刈田郡の円田盆地へと移り住んできたらしいことが分かって来ました。故郷を遠く離れた人びとが円田盆地に暮らし、活躍した時代があったのです。

六角遺跡から出土した土器
関東地方の土器の技法が見られます

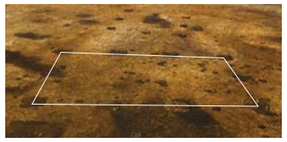
移民の人びとが
暮らした住居跡

年代	約２万年前	約１万年前	約２千年前				約１千500年前					約１千年前					約500年前					現在
			西暦 0	100	200	300	400	500	600	700	800	900	1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700	1800	1900	2000
時代	旧石器	縄文				弥生			古墳		飛鳥	奈良	平安				鎌倉	室町	戦国	安土桃山	江戸	明治 大正	昭和 平成

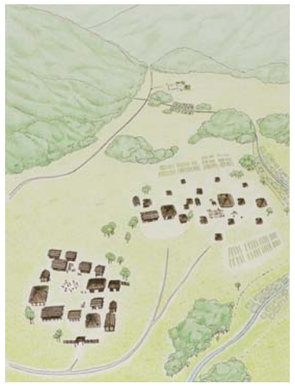
平安時代のムラと豪族の家

平安時代になると、前戸内遺跡の丘に新しいムラが営まれました。水辺に広がる湿地に田を拓き、米づくりをする農民の人びとのムラです。丘の少し高いところには、ムラをまとめる豪族の家がありました。豪族の家には主の暮らす主屋や、籾などを蓄えた倉が広場を囲むように立ち並んでいました。

豪族の家やムラの住居跡からは数多くの土器や鉄製品などが出土し（表紙写真④）、土器には「苅田」などの文字が書かれたものもありました。

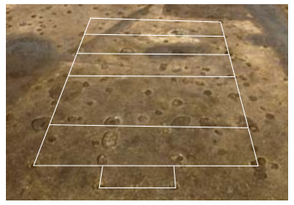

豪族の家の主屋と考えられる建物跡

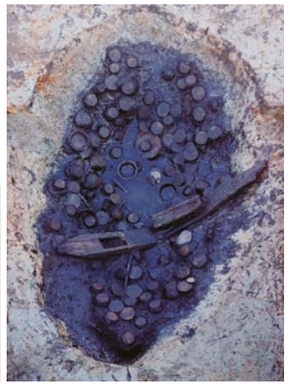
大きな柱穴をもつ建物跡


前戸内遺跡のムラと豪族の家

鎌倉武士の暮らしと職人

鎌倉時代になると、十郎田遺跡や西屋敷遺跡などの丘に武士の屋敷がつくられました。地方の役人に代わって力をつけた武士は、屋敷のまわりを堀や塀で囲み、質素な建物で暮らしました。また、彼らは屋敷の中にさまざまな職人を抱えました。十郎田遺跡の屋敷の一角からは、作りかけの木器の椀や皿が大量に出土しています。十郎田の屋敷には木地職人の工房があったようです。「遠刈田こけし」の木地集落ができる500年も昔のことです。今も昔も、蔵王山麓の豊かな森が人びとの暮らしを支えてきたのです。


武士の住まいと考えられる建物跡


大量に出土した木器の未製品

土塁と堀で守られた領主の館

高さ３ｍもある土塁が今も残る西小屋館跡は、鎌倉～室町時代の小村崎あたりを治めた領主の館の跡です。館の一部を発掘調査したところ、土塁の外側で堀跡が発見されました。幅が推定８～10ｍ、深さ１ｍ以上。堀の岸は急な角度で削り取られ、簡単には抜け出せないように工夫されていました。西隣では家臣の屋敷跡が見つかりました。堀の外側も、家臣の武士がしっかりと守りを固めていたのです。

館の守りを固めた堀の跡と土塁

西小屋館跡を囲む土塁と堀の跡（正面の木立の部分に土塁があります）

江戸時代の平沢・小村崎

江戸時代になると高野家が平沢要害を拝領し、250年余りにわたって平沢の町づくりに力を尽くしました。高野家が整備した平沢の町割りは、今もその名残り留めています。約200年前の農家のたたずまいを今に伝える奥平家は、江戸時代の平沢村・小村崎村の肝入（村役人）を務めました。

江戸時代初期の屋敷跡が発掘された車地蔵遺跡では、美濃（岐阜県）の志野織部産や明（中国）の景徳鎮産の陶磁器、三引両の紋が入った漆器など、高級品が出土しました。裕福な階層の人物であったことがうかがわれ、高野家または当時小村崎に領地を得ていた秋保氏の家臣屋敷と推定されています。

屋敷跡から出土した漆器

江戸時代後期に建てられた奥平家住宅

古代人の「ものづくり」

古代の人びとは、身の回りにあるさまざまな材料を利用して生活に必要な道具を作り出していました。そうした「ものづくり」の跡が、円田盆地の遺跡からも見つかっています。

土器づくり

前戸内遺跡では、粘土を採掘した穴が見つかりました。穴の中からは、土器とともに焼けた土や木炭片が多く出土しているので、ここで採掘した粘土を使ってムラの中で土器づくりをしていたと考えられます。

粘土を採掘した穴と、穴の中から出土した土器（前戸内遺跡、奈良時代）

木器づくり

十郎田遺跡では、武士の屋敷の一角から作りかけの木器が大量に出土しました（表紙写真⑤・⑥）。椀や小皿の形に粗く形を整えたもので、この後にロクロで削って仕上げました。さらに漆を塗って、漆器として使われることもありました。

ケヤキの木を無駄なく使い、どれも同じように作られているので、腕の良い職人がいたことが分かります。同じ形のものを大量に作っているので、仕上げた製品はそのまま市で売られたか、漆職人のところへ売られたのかもしれません。

出土した木器と推定される完成品の形（十郎田遺跡、鎌倉時代）

鉄器づくり

前戸内遺跡では、竪穴住居跡から鎌や小刀などの鉄製品が出土しました。小鍛冶を行なう時に出来る鉄かす（鉄滓）も出土しているので、ムラの中に鉄の道具づくりをする鍛冶工房があったと考えられます。

鉄の小刀と鎌、鉄かす（鉄滓）（前戸内遺跡、平安時代）

炭焼き

西屋敷遺跡では、炭焼きをした穴が見つかりました。この穴は一辺が70～90cmほどの正方形で、深さ40cm以上あります。穴の内側は、火を受けて赤く変色していました。このような小さな施設で焼かれた炭は、鉄器づくりで使われることが多かったようです。

炭焼きをした穴（西屋敷遺跡、戦国時代）

まとまって出土した木器の未完成品など（十郎田遺跡、鎌倉時代）

左：加工した刃物の痕跡　右：ロクロに固定した痕跡（十郎田遺跡、鎌倉時代）

土器から見える地域間交流

在地の土器（左）と関東系土器（十郎田遺跡、飛鳥時代）

十郎田遺跡や六角遺跡などでは、当時のこのあたりの人びとが作っていた土器とは違った技法で作られた土器が出土しています。それらは、当時の関東地方の土器の技法を用いたもので、関東系土器と呼ばれています。

出土した土器の観察や研究から、飛鳥時代から奈良時代にかけての円田盆地には、関東地方や福島県域から移り住んだ人びとの暮らすムラがあり、この土地の人びとと交流していたことが分かってきました。

祈りとまじないの習俗

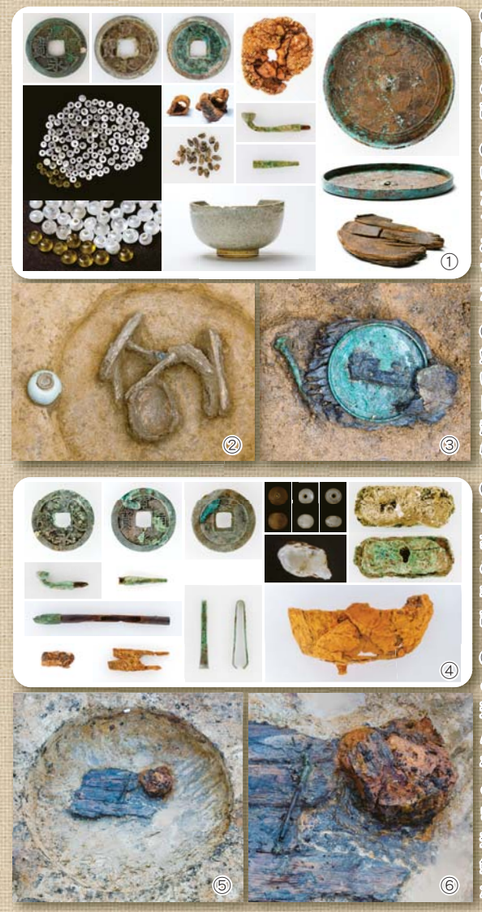
前戸内遺跡など平安時代のムラの跡からは、文字の書かれた土器が多く発掘されました。書かれている文字には「大」、「内」、「丈」、「人」、「本」、「善」、「勝」、「草手」、「苅田」などがあります。１文字のものが多く、文字の意味が分かるものは多くありません。地名や人名のほかに、縁起の良い言葉や文字が書かれることもありました。町内の東山遺跡では、「万田」などと書かれた土器が大量に出土していて、豊作などを祈るまつりをした跡だと考えられています。

西屋敷遺跡では、平安時代の井戸の底から大きな石皿と土器、桃の種などが発掘されました。地中深くから水を汲み上げる井戸は、古くから神聖な場所で、地下の黄泉につながる異界の入口とも考えられていました。使わなくなった井戸を埋めるときには、魔除けの儀式をしました。桃は、不老不死や邪気を払う力のあるものと信じられていました。西屋敷遺跡でも、井戸を埋める前に土器や桃などを沈めて魔除けのまじないの儀式を行なっていたのでしょう。

文字の書かれた土器（前戸内遺跡）

土器や桃などが沈められた井戸跡（西屋敷遺跡）

井戸の底から発掘された土器と石皿（西屋敷遺跡）



①六角遺跡の墓地ではお金、数珠、米、煙管、茶碗、鏡箱に納められた銅鏡などが副葬されていました。

②まだ遺骨が残っているお墓もありました。正座をした姿勢で、胸のあたりからお金が出土しています。棺の外では茶碗が出土しています。

③鏡箱に納めた鏡、煙管などが出土しています。鏡の文様は「蓬莱図」という縁起の良い図柄で、女性の持ち物でした。

④磯ヶ坂遺跡の墓地では、お金、数珠、火打石、煙草入れ（留め金）、煙管、ハサミ、毛抜き、鉄鍋などが副葬されていました。

⑤・⑥見つかったほとんどのお墓では、遺骨は残っていません。このお墓では、棺の底板の上で煙管と鉄鍋が出土しています。町内で発掘調査されたお墓から鉄鍋が出土したのはこれが初めてです。

弔いの習俗と「イエ」のルーツ

六角遺跡と磯ヶ坂遺跡などでは、江戸時代の墓地が発掘されました。どちらも見晴らしの良い丘の上にあります。長い年月の間に遺骨は土に還っていましたが、埋葬された人の生前の愛用品が多く出土しました。比較的裕福な豪農の一族の墓地だったようです。

お墓に入れたお金は、あの世で三途の川を渡るときの渡し銭や、極楽へ行くまでの旅費として家族が死者に持たせたものです。茶碗には、ご飯を一杯に盛って持たせました。旅立つ死者のお弁当です。磯ヶ坂遺跡では、棺の中に鉄鍋が入れられていました。各地の遺跡の例を見ると、顔や頭にかぶせてあったもののようです。特殊な病気や事件、事故で不慮の死を遂げた人を埋葬するときに、その災いが周囲の人びとに広がらないようにするためのまじないだったようです。

現在では、亡くなった人を火葬にして遺骨を先祖代々のお墓に納めるのが普通ですが、昔は一人亡くなるごとに墓穴を掘って埋葬しました。はじめはその時々で埋葬する場所が違っていましたが、しだいに同じ家の一族がまとまって墓地をつくるようになりました。村の中で一族の墓がつくられるようになったのは、庶民が「佐藤家」や「我妻家」といった「イエ」のつながりをはっきりと意識するようになったことと関係しています。私たちの「イエ」のルーツも、ひょっとしたらこのあたりにあるのかもしれません。